

第2節 石鏃について

神矢田遺跡では総計 309 点の石鏃が出土している。これは1067点におよぶ石器の29.0%を占めるもので、神矢田という地名の由来に恥じない傾向であった。またそれらの石鏃は極めて多様な形態的特徴を示しており、中にはアスファルトの附着が観察される例も多く、石鏃の研究にあたって良好な資料と思われた。しかし不幸にして遺跡は幾度か高瀬川の氾濫によって攪乱しており、伴出土器から石鏃の製作時期を確実に推定することができなかった。すでに前報告と今回の報告で石鏃の類別と若干の説明を加え紹介してきた。ここではさらにそれらを総括的に分析、検討を加えて類別し、神矢田に出土した石鏃の大要を把握しておきたい。縄文時代にめざましい発展を遂げた石鏃は、それぞれ製作、使用された時期によって固有の特色を備えているものと思われる。狩猟民族にとって石鏃の製作は不可欠の生産手段であったにちがいない。石鏃の問題はそうした民族の弓矢の文化としてとらえ、広く時代背景を含めて考察すべき要素をもっている。だが個々の遺跡の報告でわずかに紹介されることが多く、石鏃の発達を体系的に理解しようとする試みは必ずしも多くはない。石鏃の素材が石であることもあって、土器ほど多種多様な展開に乏しいことも一つの起因であろうか。ここではあくまでも神矢田に出土した石鏃の位置づけに最大の関心があるのだが、枠を押し広げて縄文時代に使用された石鏃の中でそれをとらえてみたい。つまり山形県内とくに庄内地方を中心とした地域に発見されている石鏃の発生・発展する過程を考察し、一つの試論として提示しておきたい。

神矢田で出土した石鏃 309 点のうち 11 点は先端部の欠損品などであり、類別の可能な石鏃は 298点であった。原材はおよそ95%が硬質かあるいは硅化の強い頁岩である。わずかにチャート、石英岩、黒曜石などの製品がある。石鏃の未成品あるいは半成品も出土しているがここでは除外した。欠損品でも形態的特徴を具備しているものは含めた。また類別にあたって基準とした点は全形の成形法と基部の作出法である。細かな製作技法をめぐる問題は別の機会にゆずり、今回は形態的特色のみによって類別した。その結果、神矢田遺跡で出土した石鏃は6群20類に分けることができた。第35図はその代表的な例を図示したものである。また類型の()内は第3～5次調査で出土した石鏃を類別した時の仮番号(47・49頁)である。また図には出土したそれぞれの点数を数量として示し、その下の()内に百分率による数字を加えておいた。以下、図にしたがって説明していきたい。

A 群 基部に突出する茎(なかご)の作られたいわゆる有茎石鏃である。

A 1 類 基部の肩部が「ハ」の字形に内側に入り込んだ石鏃である。基部は細長い場合と舌状に突出し短かい場合がある。

A 2 類 肩部が水平で直線をなす石鏃である。

A 3 類 肩部が漏斗のように外側へ張り出し、肩部と基部が鈍角をなして堺界点が明瞭な石鏃である。舌状をなす基部はやや細長い。

類型	代表的な形態	数量 (%)
A 1 (1)		14 (4.7)
2 (2)		23 (7.7)
3 (3)		40 (13.4)
4 (4)		57 (19.1)
5 (5)		10 (3.4)
6 (6)		15 (5.0)
7 (7)		7 (2.3)
8 (8)		3 (1.0)
B 1 (9)		15 (5.0)
2 (10)		13 (4.4)
3 (11)		5 (1.7)
C (12)		22 (7.4)
D 1 (13)		7 (2.3)
2 (14)		9 (3.0)
3 (15)		13 (4.4)
4 (16)		3 (1.0)
E (17)		5 (1.7)
F (18)		35 (11.7)

第35図 神矢田遺跡出土の石鏃形態分類

A 4 類 肩端から基部先端にかけてゆるやかに内彎し、肩部と基部の境界点が不明な石鏃である。典型的な舌状の基部をもつ。

A 5 類 肩部附近が円く整形され、下ぶくれの紡錘形をなす石鏃である。基部は細く短い。

A 6 類 幅広の不整な四辺形の下端に細長い基部のついた石鏃である。小形が多い。

A 7 類 細長い楕円形の一端が尖り、他の一端に基部を作出した石鏃である。

A 8 類 基部が二つの円弧を連続した曲線で内彎し、その中央に浅い舌状の基部をもつ石鏃である。小形である。

A 9 類 A 7 類の刃部に鋸歯状の凹凸をもつ石鏃である。

A 10 類 A 3 類に似た基部が幅広で、その下端が内彎している石鏃である。

B 群 全体が菱形を呈する石鏃である。上半部より基部に比定される下半部がやや短い。

B 1 類 小形の部類でやや幅広の石鏃である。

B 2 類 スラリとした中形の石鏃である。

B 3 類 やや大形で幅広く両側のカドがない石鏃である。

C 群 全体が楕円形を呈し、一端は鈍く尖り、他端は円く基部に整形された石鏃である。幅広である。

D 群 基部にわたりのある無茎石鏃である。比較的の小形が多い。

D 1 類 二等辺三角形の底辺に深く半円状の抉りがある石鏃である。

D 2 類 全体が五角形を呈し、その底辺にやや深い抉りのある石鏃である。脚部が張り出した形をなす。

D 3 類 二等辺三角形の下端が円くすばまり、浅く小さな抉りのある石鏃である。

D 4 類 正三角形の底辺に浅い抉りのある石鏃である。

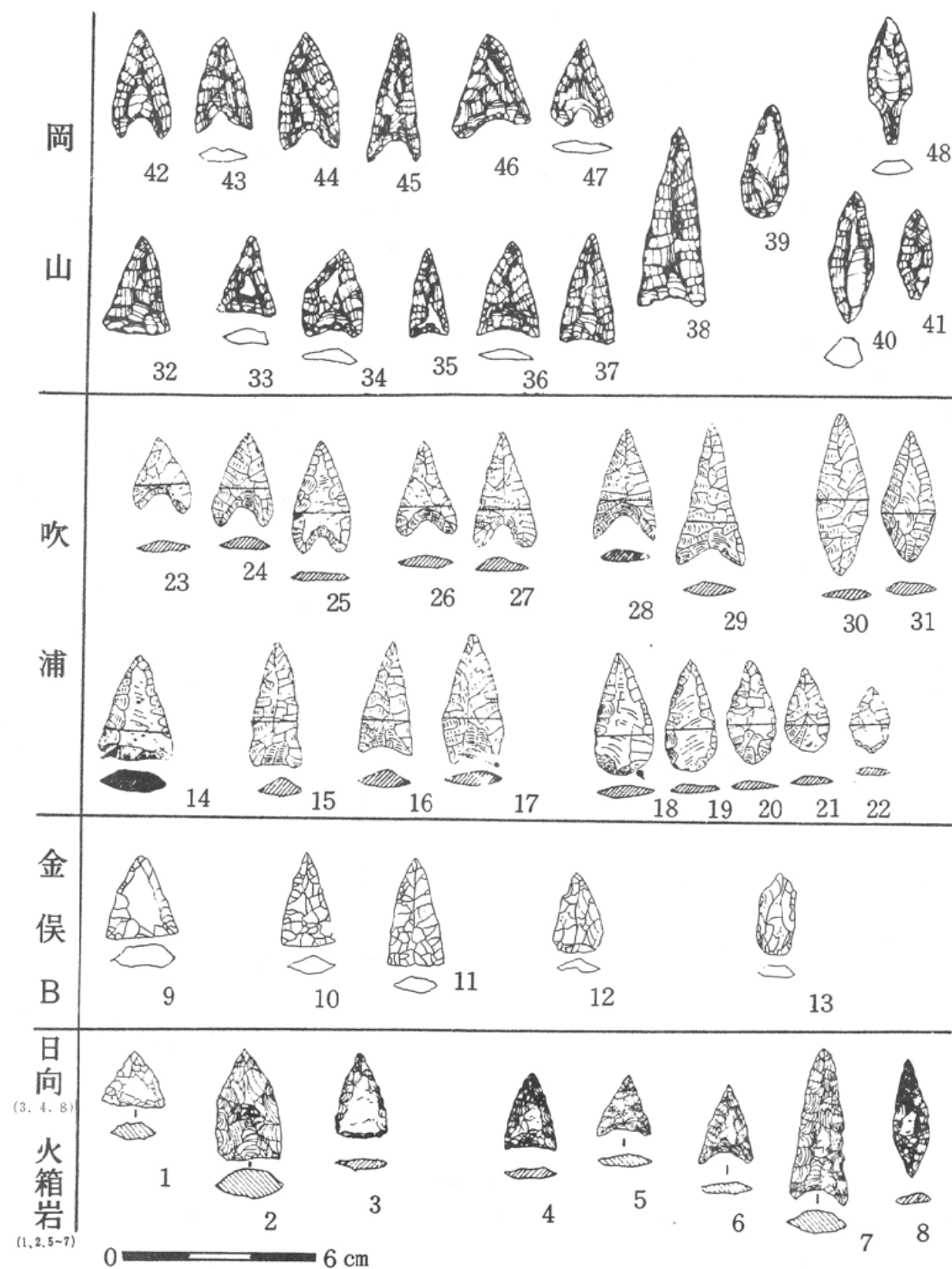
E 群 正三角形に近い形をもち、無茎で抉りのない石鏃である。

F 群 全体が棒状をなす石鏃である。断面はほとんど楕円形をなし、基部の作出されている例もある。

神矢田で出土した石鏃は以上のように大別すれば6群、細別すれば20類に類別することができる。この大別したA群は凸基有茎式、B、F群は凸基無茎式（尖基）、C群は凸基無茎式（円基）、D群は凹基式、E群は平基式の石鏃とそれぞれ呼ぶこともできよう。数量的にはA群が171点で57.4%、F群が35点で11.7%、B群が33点で11.1%、D群が32点で10.7%、C群が22点で7.4%、E群が5点で1.7%の順であった。A群が6割近い数値を示し最も多かったのであるが、この中でA 2、A 3、A 4類が大半を占め、A 7～A 10類は極めて少ない。A 9、A 10類はそれぞれ1点づつしか出土していない。またC群、F群などの出土類が多いことも注意される。F群は石鏃とする考え方もあるが、基部の作出された例もあり、石鏃はつまみのついた針部の細長い石器が出土しているので石鏃と考えた。このような数量的な問題は出土土器が縄文後期末～晩期末にかけて多量に出土したことと多少結びつけて考えることもできよう。しかしどの型式の土器とどの種の石鏃が同時期であるかというような詳細は不明である。神矢田に出土した20類の石鏃のすべてが各時期にわたって常時使用されていたとは考えられない。むしろ各種の石鏃はそれぞれの時期的な背景の中で発生し、発展し、消長の途を辿ったと考えるのが妥当であろう。特に数量的に少ない例はある一定の時期と考えてもよからう。しかし神矢田で発掘調査によってこの問題を見定めることはできなかった。ただ一ついえることは出土している土器が縄文時代中期末葉の大木10式から後期・晩期を経て、続縄文ないし弥生時代初頭の福浦島下層式にいたるものであるから、これらの石鏃もまたこの時期の中でそれぞれが盛衰したものであろうということだけである。

さてつぎに山形県内で出土している縄文時代の石鏃の変遷過程を考えてみたい。表面採集をも含めればそれは膨大な点数となるが、発掘調査による資料でしかも伴出土器の明瞭なものとなるとかなり制限されてくる。さらに報告が行われている遺跡はそれほど多くはない。一応整理検討してみたところが縄文草創期から中期まではなんとか発展の動向を知ることができた。しかし遺憾ながら後・晩期の石鏃は良好な発見例に乏しく、整然と整理できるような状態ではなかった。したがってここではまず縄文草創期から中期までの出土例を県内の変遷を中心として考察し、後期と晩期の変遷は特異な出土例の紹介によってそのアウトラインをとらえておきたい。

第36図は山形県内出土の各遺跡の代表的な石鏃を示したものである。日向洞穴と火箱岩洞穴は草創期、金俣B遺跡は早期末葉から前期初頭、吹浦遺跡は前期末葉から中期中葉、岡山遺跡は中期中葉にそれぞれ該当する。第6表は前述の遺跡発掘報告書に見られる石鏃を類型化してその出土点数を示したものである。報告書（概報）に図示されている点数であるから、出土数のすべてであるとは限らない。しかし各遺跡の代表的な各種の形態が取り上げられているもの



第36図 山形県出土の石鏃

第6表 山形県出土の石鏃の類型と出土数

岡山				1		5	2	5	1	1	3	6	1
吹浦					2		4	3	13	2	6	8	
金俣B			1	2	5								
火箱岩	1	1	1	1	1	2	4	1					
日向	1 (1)	(2)	(4)	1 (3)	(16)	1 (27)	1 (19)	2 (3)			(3)		
遺跡													
類型	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m

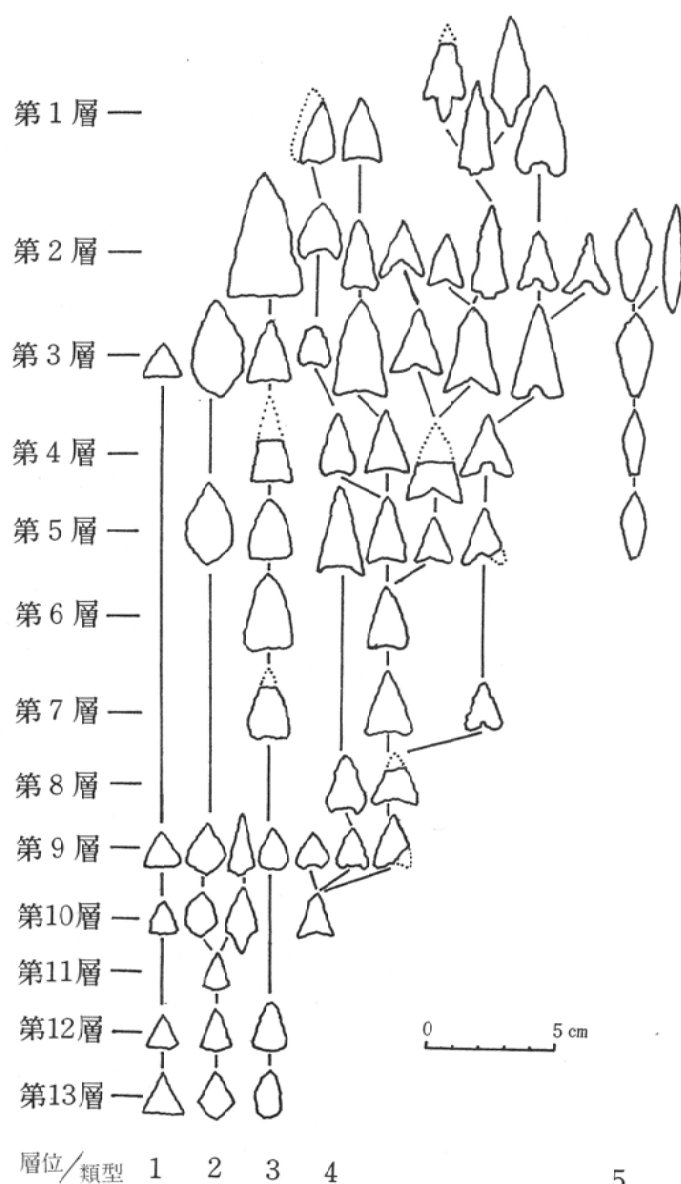
と思われるので、ひとつの傾向として充分と考えたい。ただし日向の場合は他の報告によって補っていた。表で示した類型を最初に説明したい。

- a 類 将棋の駒のような五角形に近い無茎の石鏃である。
- b 類 背の低い二等辺三角形の底辺に台形のわたくりのある石鏃である。
- c 類 正三角形に近い三角鏃である。
- d 類 二等辺三角形の底辺がわずかにふくらむ石鏃である。
- e 類 背のやや高い二等辺三角形の石鏃である。
- f 類 二等辺三角形の底辺がわずかに内彎する石鏃である。
- g 類 二等辺三角形の底辺に背の低い二等辺三角状のわたくりをもつ石鏃である。
- h 類 細長い菱形をした石鏃である。
- i 類 基部が円い石鏃である。
- j 類 下部がすばむ五角形の底辺がわずかに内彎する石鏃である。
- k 類 二等辺三角形の底辺にやや深いわたくりもち、両脚の先端は円い石鏃である。
- l 類 下半部が円くすばまり、わたくりをもつ石鏃である。
- m 類 肩部から基部先端にかけて内彎する有茎石鏃である。

草創期から中期までの石鏃は以上のように13に類別することができる。つぎに出土した遺跡と出土品の概要を時代順に説明したい。説明の中で出てくる数字は第36図の番号である。

草創期の土器の編年は東置賜郡高島町の洞穴・岩陰遺跡の調査ではほぼ完成している。日向洞穴では縄文時代草創期から古墳時代にわたる土器が出土している(加藤稔 1967)。草創期の土器としては微隆起線文土器・爪形文土器・押捺縄文土器・無文土器などが第4層に出土し、それに伴ってa、d(3)、f(4)、g、h(8)類の石鏃が発見された。これらは確実に草創期の石鏃といえる。表の()内の数字は『高島町史・考古資料編』の写真によってかぞえ

た点数であるが、伴出土器が明示されていないので参考資料にとどまる（佐々木洋治 1971）。しかしその中には表示した石鏃のほかには有舌尖頭器や鋳形鏃も含まれている。火箱岩洞穴では草創期から古墳時代にいたる土器が出土している（柏倉亮吉・加藤 1967）。この中で微隆起線文土器とc類（1）が第7層で出土し、第4層では微隆起線文土器、短縄文土器、爪形文土器



第37図 室谷洞穴出土の石鏃の変遷

とa（2）、b（5）、d、e、f、g（6、7）類が伴出している。このほかh類もある。草創期の石鏃は比較的に小形の例が多く、正三角形に近いものが注意される。有舌尖頭器の発展過程で、しだいに小形化する傾向を見るが（芹沢長介 1966）、草創期の初頭にはその退化が石鏃の中に現われている。日向・火箱岩でもその例がある。加藤氏が石槍とした一部は有舌尖頭器の疑いがある。また日向で出土している鋳形鏃は埼玉県橋立岩陰で判明したように爪形文土器に伴出するのであろうか（芹沢ほか 1967）。草創期から早期・前期の石鏃の変遷過程は新潟県室谷洞穴の出土例が一つの系譜を示している（中村孝三郎・小片保 1964）。第37図は室谷洞穴の発掘調査報告書に基づいて整理してみたものである。第13～4層は草創期、第3層は早期と前期初頭、第2層は早期と前期、第1層は前期以降から土師器の土器がそれぞれ出土している。伴出した石鏃もまた同じ時期と考えられる。それらの石鏃は

図のように5つの系統で理解できるようである。草創期から前期にかけての石鏃の発展がより具体的に知られ、県内でも同じような経路を踏んでいるのではないと思われる。図では出土数を省いたが、小形の石鏃がしだいに大形化していく傾向、形態がしだいに多様化していく傾向、わたくりのある無茎石鏃が発達する傾向などを知ることができる。

遊佐町金俣B遺跡は早期末葉から晩期にいたる土器が出土している（佐藤禎宏 1966）。その中で素山Ⅱ式土器、茅山上層式土器、梨木畑式土器、大木Ⅰ式土器などに伴出した石鏃は、c（9）、d（12、13）、e（10、11）類などであった。早期末葉から前期初頭にかけてはやや背の高い二等辺三角鏃が出土するらしい。大木Ⅰ～3式土器を出土した東根市小林遺跡でも同様の傾向である（保角里志、1972）。飯豊町野山遺跡からは室浜式、大木Ⅰ式土器とc、d、j、e類が1点ずつ、e類が4点、f類が2点、g類が3点表面採集されている（柏倉・加藤1968）。福島県生木葉遺跡では早期後半の土器とe、f、g、k、i類の石鏃が採集されている（永山慎一 1966）。宮城県吉田浜貝塚では早期末葉の土器とg類が出土している（後藤勝彦 1968）。以上のように早期末葉から前期初頭にかけては、比較的小形の浅いあるいは深いわたくりのある石鏃とややスラリとした二等辺三角鏃が中心となっている。

遊佐町吹浦遺跡は大木5～7a式土器が出土している（柏倉ほか 1955）。伴出した石鏃は40点である。その類型はe（14、15）、g（28、29）、h（30、31）、i（18～22）、j（16、17）、k（26、27）、e（23～25）類であった。前期末葉から中期初頭の石鏃といえるが、それは一般にやや大形化して、わたくりのある石鏃と基部の円い石鏃が多いことに注意される。

鶴岡市岡山遺跡は前期中葉から土師器までの土器が出土している（柏倉ほか 1972）。石鏃は93点出土しているが、その中で大木8a、8b式土器に伴出した石鏃が31点であった。それは次のような類型であった。d（32）、f（33、35～38）、g（43、45）、h（40、41）、i（39）、j（34）、k（44、46、47）、l（42）、m（48）類などである。中期中葉の石鏃は吹浦で出土しているわたくりのある石鏃が非常に多くなる。また菱形に近い石鏃、とりわけm類とした有茎石鏃の出土が目される。寒河江市向原遺跡では大木9、10式土器が中心に出土し、やはりわたくりのある無茎石鏃5点と有茎石鏃が1点出土している（安彦政信・東海林次男 1972）。新潟県佐渡藤塚貝塚では加曾利EⅢ、Ⅳ式土器が出土しているが、それに伴出してe類の石鏃が15点出土している（小片ほか 1969）。他の類型がなく紡錘形の底部に深い抉りのあるもので、非常に特徴的である。こうしたわたくりのある石鏃が中期中葉を中心に出土するのは新潟から中部地方、関東地方にも共通する特色のようである（中村 1966など）。

縄文時代草創期から中期までの石鏃は以上のように発展している。県内出土の限られた資料ではあるがまとめてみれば次のようになる。

- (1)草創期の石鏃は小形で正三角形に近いものが多い。三角鏃や五角形鏃、二等辺三角鏃が発生し、わたくりのある石鏃も出現する。初期には有舌尖頭器の退化した形もある。
- (2)早期にはわたくりのある石鏃が多く、両脚部は尖り、全形は背の低い小形の二等辺三角形をしている。早期末にはスラリとした二等辺三角鏃が多くなる。

(3)前期初期は早期未葉の石鏃に類似しているが、前期末期になると背の高い二等辺三角鏃の底部にわたくりがあるものと、円く整形されたものが多くなる。

(4)中期はわたくりのある石鏃が圧倒的に多くなり、有茎石鏃も出現するらしい。

以上の推移であるが第6表でいえば表の左下より右上へと発展するらしい。つまりa類からm類への発展を考えることができる。同類の石鏃も時期によって大きさや厚さがちがう。小形から大形へと変化するが、石鏃であるから大きさにももちろん限界がある。また中期まではほとんど有茎石鏃がないことも大きな特色である。円基式や尖基式の石鏃が多くなるのも前期以降であるが、四期を通じて平基式・凹基式の石鏃が発達している。神矢田は縄文後半期の遺跡でありD群とした凹基式が10.7%、E群とした平基式が1.7%であったのと同様の傾向である。このことは神矢田のこれらの石鏃が古い時期に近いということを暗示しているようでもある。なかでもD3類は中期未葉の佐渡藤塚の例に極似している。また同時期にあたる向原でも同じ出土例がある。また中期に有茎石鏃が出現しているが、これは草創期初頭の有舌尖頭器の流れの中ですぐ消滅する例とはちがう。有茎石鏃の発達には北方の影響によるのではないと思われる。青森県石神遺跡では円筒上層d、c式土器、榎林式土器に伴う石鏃は立派な有茎石鏃で、凹基式などはない(江坂輝弥 1970)。秋田県不動羅遺跡では円筒上層b~d式土器と大木7b、8a、8b式土器が共存して出土したが、凸基式の有茎石鏃と凹基式の無茎石鏃が同時に出土しているのは興味深い事実である(富樫泰時ほか 1971)。円筒文化圏と大木文化圏の相違は石鏃にもうかがわれるのである。その伝統は亀ヶ岡文化にも受けつがれ、広く東日本に影響したことも予想できる。とにかくもう少し中期以降の石鏃を考察してみたい。

中期以後の後期・晩期の確実な資料はあまり豊富ではない。そこで県外の出土例を参考としなければならない。小国町朝籬遺跡では宝ヶ峯式から大洞A'式にいたる土器が出土し、A3、A6類の石鏃が伴出している(柏倉ほか 1970)。東根市蟹沢遺跡では晩期後半期に伴う石鏃として、有茎石鏃が採集されていることが紹介されている(佐藤信行 1963)。後期後半から晩期終末にかけては有茎石鏃が盛んに使用されると思われる。新潟県三十稲場遺跡では三十稲場式土器とともにA1、A2、B1、D1、D3類などの石鏃が出土し、同県岩野原遺跡では三十稲場式土器、三仏生式土器とB2、D1、D3、E、F類などの土器が出土している(中村、1966)。同県佐渡三宮貝塚は後期・晩期の土器が出土し、A1~4、B2、C、D1、D3、D4類の石鏃が伴出している(小片ほか 1963)。宮城県沢上貝塚は大洞BC式土器と有茎、無茎の石鏃が出土しているが、無茎は図示されていないのでよくわからないがD2類の類似品であろうか(後藤ほか 1971)。さらに同県鱸沼遺跡では弥生時代中期初頭の土器とともに、A1~4、B2、C類の石鏃が伴出し無茎石鏃はなかった(志間泰治 1971)。

中期以降の石鏃はこのような状態であり、体系的に図式化するには県内ではまだ資料が不足している。しかし、後期前半は中期の尾をひいてわたくりのある無茎石鏃がまだ使用され、それに有茎石鏃がプラスされている。後期後半から有茎石鏃が多くなり、しだいに無茎石鏃が姿を消していくが、その消滅は晩期と思われる。

縄文時代草創期から晩期、さらに弥生時代初期にいたる各時期に製作使用された石鏃は以上のような変遷を今のところ考えることができる。後期以降の資料は充分とはいえないが、他県の数例をとり上げてその動向に触れることができた。石鏃は土器ほどバラエティーに富んだ変化を見出すことはできないが、やはり時代の背景の中で特異な形態が生み出され発展している。それは一見遅々とした変遷であるが、細かに観察すれば興味深い問題を見出すこともできる。また今回は県内にとどまらず他県の出土例も参考として考定したのだが、広い地域を横割りにして単純に考えることには無理があることがわかった。例えば大木文化圏と円筒文化圏では土器型式のちがいでだけでなく、石鏃も異なる発展過程をもっている。これは今後土器の横と縦の関係を考慮して石鏃の研究を進める必要がある。さらに形態的特徴という視点からの考察であったが、実際にはそれだけでも一つの傾向を把握することはできた。しかし充分ではない。長さ、幅、厚さなどの統計的な処理の上で数字でおさえる方法も考えていかなければならないと思う。あるいは石質の相違も検討する要素がある。このように満足のいく結果とはいえない面が多く、今後の研究方向を示した程度にとどまる。

神矢田で出土した石鏃の時期的な位置づけが目的であったが、後期以降の石鏃の発展をよく理解できなかった。したがって神矢田出土の石鏃は依然として問題として残る。しかしわずかであるがD3類などは向原、藤橋の例で中期未から後期初頭らしいこと、D2類は沢上の例で晩期初頭らしいこと、A類が後期後半と晩期の土器とともに多量に出土しており、石鏃の出土する時期別の傾向からもその時期に該当するらしいことが裏付けられた。この点でも充分満足のいく結果とはいえない。

以上のような極めて心もとない結びとなったが、県内外の調査による出土例を整理検討することによって、研究の方向が明らかになったような気がする。石鏃をめぐる問題は本節の冒頭で触れたように、縄文時代における狩猟民族の弓矢の文化として考えていかなければならない。当然石鏃の変遷過程だけに問題がとどまるものではない。関連する課題はいろいろ考えられよう。しかしそれは弓矢の文化の一つの断面であり、興味深い一つのテーマである。